

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	水明インターネット句会（選句・選評） 令和六月
光雲2			伯男 朝香	孤舟 土璃 春幹 マスミ	しんい みづる	音思 たか子 允孝		俳爺 破れ蓮	田猫					きいち 絵夢 風子	
我儘は我家の家系木葉木菟	畦道にカメラ接写のアロハかな	玉砂利の続く参道夕涼み	水芭蕉苞という帆を上げにけり <small>視点が良いです。中七下五が秀逸。美しい景色が目には浮かぶ。</small>	暴れ梅雨鹿と軒借るセーラ服 <small>仲良く鹿と雨宿り。鹿とセーラー服の取り合わせが新鮮で、景も面白い。少女と鹿が軒下で、雨と互いを気にしながら忍んでいる様子が浮かぶ。修学旅行か、折からの暴雨を避けて借りた軒先。鹿とセーラー服の取り合わせが面白い。</small>	涼しさや老舗に並ぶ打刃物 <small>職人技の鋼びかりの鋭さを季語に託している。芸術的ともいえる冷たく光る打刃物に涼しさを覚える感性に共感します。</small>	顔に泥つけて田植の園児たち <small>子供達の可愛い様子がうまく描かれています。田植えて園児たちが楽しくはしゃいでいる情景の表現が上手です。園児たちが泥だらけになつての田植え風景が微笑ましいです。</small>	風透り洗濯ものに花の香が	青芝をしとねに浅き昼寝覚 <small>しとねに浅きが巧い詠み。青芝に寝転んでまどろむ様子が窺える。</small>	六月の瞼に天覧サヨナラ打 <small>長嶋さんか。「六月の瞼に」という表現が美しい。</small>	雨の田に植えしばかりの苗並ぶ	酔いてなお惑う足取り古稀の春	担い手の若き夫婦や麦の秋	まだちよつと手のひら黄色柏餅	梅雨の間の水没都市に浮く手紙 <small>浮いた手紙が印象的、都会の梅雨も油断出来ません。手紙”の重さが読み手の心を打つ。洪水の大景に極小の手紙を捉えかつこの手紙が種々のものを想像させる。</small>	
石関六弦	高原ひろし	青木鶴城	森佳月	ありぎりす	風信子	邦治	邨虚空	薫風	加茂瞳人	大束暮風	おじいちや ん一号	檜鼻ことは	太田怒忘	松岡拓司	

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	水明インターネット句会（選句・選評） 令和六月
六弦 順一		のり子		山菜		一葉 ことは 孤舟 俳翁 ひろ志 薫風 きいち 総太郎 曆文 みづる 稀香 しーしー マスミ	マスミ	六弦			たか子 光雲2 かげろう	怒忘 素風	のり子 総太郎	修月 を	
薔薇の香やオープンカーに乗る夫人 <small>誰の夫人？何か起きそうな予感。もしや摩耶夫人ではと言う空想が働いたのかもしれない。</small>	パジャマの上着脱ぎしけり夏椿	青田風田毎に色の変わりけり <small>夏の田んぼが見たくなる。</small>	合歓の花カールをされし睫毛ごと	退院や季節は飛んで釣忍 <small>浦島様、ご退院おめでとーございます。「季節は飛んで」に胸がじ</small>	夕闇の奥から招く牛蛙	手うつしに貰ひ受けたる螢の火 <small>微笑ましい景が目につかぶ。そつとやさしく手移して貰った螢。一手のうへにかなし消ゆる螢かな。向井去来」を彷彿する。親子の姿が浮かびます。作者の優しさも浮かびます。螢の火は恋の火。手うつしの螢の火の表現が詩的です。私も父からもらい受けた思い出があります。懐かしい、記憶の中にある光景です。親にももらった螢の火を思い出させてくれました。螢を慈しむ気持ち伝わる。闇の中でそつと手渡された儂い命の光に美しさと哀しさが溢れる。逃げないよう受け渡す緊張感も。螢を手うつしで貰う。ノスタルジックな情景。こんなことあつたよな。</small>	三伏にハガキ一枚海渡る <small>三伏とは、酷暑の候を言う。今年には諸外国も猛暑に襲われていると。か。海を渡つたのは、暑中見舞いの葉書か。受け取つた人の嬉しさが偲ばれる。</small>	今生を歎く金魚の泡（あぶく）かな <small>人生を金魚の世界で語る意外性。</small>	朝餉散髪足湯で地酒いざ昼寝	ビール注ぐ美と愛と恥の女神なら	子燕を起こさぬよふに家を出り <small>家主の子燕に対する暖かな愛情が感じられます。自宅に作られた燕の巢への気遣いに共感。</small>	五月雨を逃るる堂の深廂 <small>景が浮かびました。雨宿りをするのであろうか、「深廂」が心情を表している。</small>	肩車親子揃ひのアロハシャツ <small>多幸感のある夏の光景です。</small>	完成のジグソーパズル梅雨晴間 <small>ジグソーパズルの完成がちょうど梅雨最中の晴れ間のことであった。完成したので梅雨籠りしないで済みますね。</small>	
秋谷風舎	三つ園春幹	幸子	衛	新曆文	山川充	松田素風	傘張り浪人	光雲2	森下山菜	網野月を	新井のり子	破れ蓮	荒一葉	小野町子	

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	水明インターネット句会（選句・選評） 令和六月
一葉	しんい 破れ蓮 素風 かげろう	ひろ志 しーしー	楽 きいち 佳月		俳翁		楽			一葉	佳月 1号 風子				
気動車が古志の植田を一直線 <small>少子高齢化の村では民の夕餉の煙も少なくなつたが、季節は確かに初夏である。季語が的確</small>	釣り上げて鮎赫然と掌に躍る <small>掌の鮎の黄金色のがやきと姿の美しさ。「赫然」という措辞が効いている。田園を疾走するデイズル車が目に浮かぶ。</small>	再会の会釈は浅し夕螢 <small>螢は夏の夜の風物詩。暮れなずむ水辺の散策、また出会いました。以前の関係があれこれ思われる。</small>	飛魚飛んでしろがねに染む能登の海 <small>能登を思いやります。飛び魚は群れなして飛翔するので、海が白銀に染まる、確かな描写が良い。</small>	紫陽花の花からこぼれし雫かな <small>異国で挙式する女性のがれジュンブライド</small>	六月の花嫁異国の教会	降らずとも咲きほこる粹紫陽花や	子燕やねだり負けせぬ口を開く <small>子供は遅しく育つてほしいものです。</small>	浅葱色のまわしに懸ける夏場所や	薔薇アーチ香りも畳霽傘	居間通り厨に届く青葉風 <small>気持ちの良いこの風は青葉風でなければならぬ。</small>	五月雨や忘れ去られし鎌ひとつ <small>浮世絵か映画のワンシーンを見ているようです。静かに降る雨を見ながら過去を思い返しているのでしょうか。座五の鎌一つにびたりと焦点を合わせている。</small>	暮れがての乾く風音麦の秋	五月晴れ帽子をとらぬままの礼	緑陰や悪餓鬼どものひそひそと	
しーしー	安田蝸牛	みづる	河野凡士	明陶家	反町修	孤舟	小林土璃	朝香	いさむ	和田イチ子	俳翁	しんい	ひろ志	横井あらか	

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	水明インターネット句会（選句・選評） 令和六月
音思 霜里 幹子			凡士 ゆりあ	あらか 拓司	1号	拓司	蝸牛 曆文 のり子 霜里 幹子		修 1号 光雲2		京子 幹子		風子	瞳人 楽	
塩焼きか炊き込み飯か鮎一尾	仏壇の灰を均して夜の朧	天の川ホームシックになりけり	せせらぎとたはむるこゑやあいの風	夏至来る水の地球の朝の風	後悔を振り捌くごと衣替え	一定の音と書を読み扇風機	杖を突く妻に傾ぐる白日傘	夏木立よき風生まれ子等の声	玉響の生命の謳歌蝉時雨	日傘差し走る女生徒駅の前	万緑や那須の五峰を引き寄せる	日雷廊下の角の薬売り	ほうたるや風に続いて水の音	サングラス外さば勢ひなき眼	
かげろう	岡本たか子	平野楽	絵夢	丸山マスマ	霜里	吉川拓真	後藤允孝	ゆりあ	伯男	総太郎	渋谷きいち	岸谷由仁	龍野ひろし	本橋稀香	

ほんとは怖いオ兄イさんは、メガネ取つても怖いものです。と言つても、実はシンだ眼の方が怖いこともありまますから。感じたくない老いを感じます。

蛍狩イメージ力が鮮明。

作者の日常生活に好感。素直な句です。どつしりとした佳句。下五が良い。那須の峰々の雄大さと自然の爽やかさが感じ取れる。下五が

上五中七の措辞が詩的で素晴らしい。玉響という言葉を初めて知りました。玉響の人生も全力で謳歌できると良いですね。

優しい気遣いが察せられる。優しい夫に感服。白日傘と老夫婦の対比がいい。優しさで感謝の静かな午後。奥さんを思う気持ちに暖かさを感じました。

意味の拡散を喚ぶ感じが好みます。

なにがあつたのでしょうか。気分を替えて前向きに生きましよう。

地球全体に夏の清々しさがもたらされたように感じました（南半球は冬至ですが）。「の」の使い倒し方が好きです。

北陸本線だった、あいの風富山鉄道を想起させられた。季語と良きあ

期待に反して一尾しか釣れなかつた鮎、どう料理して食べようかと悩むところですね。うーん、悩みますねえ。鮎の美味しそうな感じか良く出ている。どの料理にしようか迷いますよ。

75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	水明インターネット句会（選句・選評） 令和六月
蝸牛 しんい 町子 月を 素風		土璃	町子 六弦			秀子	順一			しーしー 伯男 あらか	瞳人 拓司				
立話する間に失せし蝸牛	紫陽花にハエも集るか出逢い傘	露草の参道があり石仏	薔薇の門潜る誉れのなけれども	明易し今は何時と見る時計	小満のガザニア眩し古稀間近	夏寝坊通過電車がなんかヤダ	ぐっすりと眠れるように黒揚羽	汗かけば片方の足を膝に置き	隧道を抜ければ信濃五月闇	戸を繰れば海の輝き夏座敷	羽抜鶏くきくきくきと首廻す	美味しいねなどと二人で栗南瓜	少子化やいつまで続く蟻の列	今年竹罌間をゆく空青し	
小さいものへの目配りが感じられる。掌の鮎の黄金色のかがやきと姿の美しさ。蝸牛が速足なのか、話が遅速なのか。観察が行き届いている。		日常気にも留めないような風景も、見ようによつては感慨深いものがあるのだ。		薔薇のアーチを潜る時、何も無いのに晴れがましい気持ちになりますね。梅雨の晴れ間、蝸牛どこにいつたのかなあ。楽しい立ち話。		寝坊している時の電車の音はイヤですね。よくわかります。				音でなく輝きなのが意外。清々しいです。夏休みのわくわく感。幼い頃に家族で民宿に泊まった懐かしい思い出が想起されました。	滋酔郎が首をまわしているのかと錯覚しそうです。オノマトペの的確さに一票。				
薫風	邨虚空	大東暮風	加茂瞳人	檜鼻ことは	おじいちゃ 一号ん	松岡拓司	太田怒忘	石川順一	染谷風子	立野音思	小林京子	佐藤幹子	羽島秀子	雪待月田猫	

90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	水明インターネット句会（選句・選評） 令和六月
破れ蓮		朝香	六弦		暮風 土璃 薫風	蝸牛 修 ゆりあ	山菜 絵夢	凡士				音思	春幹		
さくらんぼ行厨に在る三粒かな <small>中七の「行厨に在る」が良い。</small>	桑の実の降るや欠伸の鯉の口	石楠花（しゃくなげ）や女人高野の仏たち <small>季語の石楠花と中七下五の取り合わせが秀逸。</small>	初恋の道で木苺手渡され	猫描きて犬になる奴麦の秋 <small>憎めない奴。</small>	背の孫の駄々の嬉しき夜店かな <small>お爺さん、お婆さんの心情がよくでていて、微笑ましい。孫の愛らしさが伝わる。</small>	波の音聞いて旅寝の明易し <small>旅の宿に聞く、朝の潮騒に季語がマツチする。夜が短く波の音が聞こえて旅寝の目が覚めてしまった。同感です。</small>	アビーロードに歩幅合はせて若葉風 <small>アビーロードの若葉風とはなかなかかすてきな目の付け所！風に♪乗り♪ヒヤカムズザサン＆＃9836；聞こえ♪来る。</small>	帆布製のテントを張りし昭和かな <small>帆布テントはもう半世紀前のこと、昭和は遠し。</small>	青梅や大口不遜の新世代	庭いじり円座にメガネとこども凶鑑	ゲップして放屁して飲むラムネ泡	雨降ってつづのる気持ちや額の花 <small>雨が降って会えない日、庭の額の花を眺めていると、会いたい気持ちが募ってきます。</small>	乾杯のジョッキの音の涼しさよ <small>親しい人達とのジョッキのガチンコの音が響きそう。</small>	対岸の球児の声や夏旺（さか）ん	
松田素風	森下山菜	光雲 2	新井のり子	網野月を	荒一葉	破れ蓮	石関六弦	小野町子	青木鶴城	高原ひろし	ありぎりす	森 佳月	邦治	風信子	

105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	水明インターネット句会（選句・選評） 令和六月
		暮風	みづる						ことは	霜里京子		山菜	ひろ志 ことは		
鶏小屋の卵を取るや栗の花	雪帽子ずり上がりゆく富士や初夏	木漏れ日に羽ばたく鳥や雲の峰	ピザを待つ夏花盛り老いの庭 <small>せな空気が充滿しているよう、家族や友人とのランチか、それとも一人なのか色々想像が膨らむ楽しい句。</small>	麦秋や雲影しるき浅間山	カーテンの襞よりヒゲをごきかぶり	青鷺を烏急撃したりけり	しなやかに弾の飛びいで水鉄砲	ダービーの馬券を賭ける肴かな	梔子の花より白き夫人かな <small>大正ロマンの小説を読むようです。</small>	夏帽子少し気持の若返り <small>日差しに負けない明るい色を。</small>	風の道阻みて灼けるビルの街	草刈れば「早く帰れ」と母衣打ちの <small>そりやあすんません、きぎす様。</small>	リハビリの杖は左手花菖蒲 <small>不自由な右足を庇いながらの杖歩行のリハビリ、菖蒲の咲く水辺まで来られるようになりました。少しづつ少しづつリハビリがすすみますように。</small>	トマト切る母の右手に小さき皺	
朝香	小林土璃	和田イチ子	いさむ	しんい	俳爺	横井あらか	ひろ志	三つ園春幹	秋谷風舎	衛	幸子	山川充	新 暦文	傘張り浪人	

120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	水明インターネット句会（選句・選評） 令和六月
				かげろう	春幹 由仁 田猫			暮風 怒忘 由仁		曆文 薫風 伯男		町子 怒忘	たか子	ゆりあ	
扇風機お前だけだよ理解者は	追憶に連れ去られるや遠花火	母の夏遠い記憶に溺れゆく	万緑に縛られ夜は妻と酒	五月闇スマホが照らす人の顔 <small>最近よく見る光景のあるある感がよい。</small>	夏空を濡らすホースのしぶきかな <small>カラッと晴れた空に、ホースから漏れるしぶきの舞い上がる光景が浮かぶ。暑くなる日の朝のようなさわやかさを感じた。ホースが濡らす青空には、おそらく希望の虹が出ている。爽快な句。</small>	右頬の瘡蓋取れて夏に入る	黒松の幹に凭れる白四葩	おほかたはあらぬ方吹く扇風機 <small>発見ともいえぬ発見、リズムもいい。年代物でしようか。火事に気を付けられてください。壊れているのか、想定と違う動きをする扇風機をずっと使っていたことを思い出した。</small>	梅雨ぐもり沼の葉陰に牛の声	蜘蛛の罫に雫を留め雨上る <small>雫を留める蜘蛛の罫、落ちそうで落ちない。蜘蛛の巣に光る雨滴が目に浮かぶ。キラリと光っていますね。</small>	迎え梅雨てるてる坊主に願いかけ	母と吾は違う昭和や豆ごはん <small>戦前生まれと戦後生まれの親子、豆ごはんへの思いもそれぞれ。お母様と作者と、豆ごはんがどう異なるのか、クスツとしました。</small>	日照り雨はぢらふやうに茄子の花 <small>全く同感です。これから地球はどうなっていくのか？</small>	茄子の花が見えます。	
吉川拓真	伯男	ゆりあ	渋谷きいち	総太郎	龍野ひろし	岸谷由仁	しーしー	本橋稀香	みづる	安田蝸牛	明陶家	河野凡士	孤舟	反町修	



135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	水明インターネット句会（選句・選評） 令和六月
田猫	瞳人	月を		秀子 允孝		允孝		稀香 月土 凡夢 絵夢 秀子	孤舟 順一			稀香 由仁	あらか	一葉 総太郎 朝香	
梅雨の月とぎれては鳴るオルゴール 梅雨の時期の幻想、切なき、不安定さが出ていて美しい。	付け文は金釘流よ青大将 ありのままの、かな釘で行くところに、こころが出ているなあ。田中アオ大将の真面目顔が浮かんできました。	浴衣買ふ青は妹赤は姉 妹さんの作句かな？	蒲の穂の発育の良さに佇みぬ	蛍袋吐息をそっと包み込む 吐息を包みこむという表現が素敵です。蛍袋を見ていると息を吹き込みたくなります。	梅雨晴間ミッドタウンのテラス席	学び舎の青葉光るや鬼ごっこ 青葉の元、学校の休憩時間の一コマですね。鬼ごっこがいいですね。	傷心の男らと飲む生ビール	噴水の天辺にある小競り合ひ 噴水をよく観察なさって小競り合ひという表現を見つけ出されたと思います。よく見れば確かに、観察の賜です。視点と動きの捉え方に俳味を感じる。よく観察しています。小競り合ひの表現が面白い。	香の立つ湯子らの玩具は菖蒲太刀 賑やかな様子が思い浮かぶ。先ずは菖蒲湯を作ってくれた人に感謝ですね。菖蒲太刀。意外と自作の菖蒲湯だったのかもしれないが。	古稀初のトロフィー撮りし五月晴れ	最果ての川はどでかい天の川	夏川のせせらぎと行く貴船道 梅雨のじめじめ感をのど飴で上手く表現なさっています。ごろりとした異物感が、季節の変わり目をはつきりさせるようで面白いと感じました。	雨は音水は色変へ男梅雨 かつて貴船で見た緑陰を思い出して涼しい気持ちになりました。	男梅雨を音と色で端的に詠んで成功。初心者の私にも判りやすいです。今年の梅雨にびつたりだと思えます。すつきりとした句。リズムも良い。	
くるみ	染谷風子	立野音思	石川順一	佐藤幹子	小林京子	雪待月田猫	羽島秀子	岡本たか子	かげろう	絵夢	平野楽	霜里	丸山マスマ	後藤允孝	

150	149	148	147	146	145	144	143	142	141	140	139	138	137	136
														京子
														かな書きが成功した。 ひとりではどこへもゆけぬさくらんぼ
														くるみ

水明インターネット句会（選句・選評） 令和六月